

(公開学習Ⅰ) 第4学年1組 国語科学習指導案

授業者 林 多恵子
4年1組 教室

1 単元名 神話の国からこんにちは ～“いなばのしろうさぎ”を追って～

2 授業構成

(1) 教材に対する反省と新しい提案

国語科では、現在二つの教材研究の問題点があると考ええる。

一つ目は、国語科の授業では、教師の教材研究の善し悪しに関わらず、教材(作品)の魅力によって授業が支えられるということが、しばしば起こることである。よって教師の側も、教材の魅力を損ねることなく無難な教材解釈に終始し、「とりあえず」子どもがその作品を楽しむことができているだけで、子どもが満足してしまうことが少なくない。しかしそれは、魅力的な教材に子どもを触れさせたというだけで、子どもの「学び」が実現しているとは言いがたい。

二つ目は、これは国語学習指導一般に言えることであるが、殊に語彙指導において、指導の在り方が「場当たりの」もしくは「トピック的」なものになりがちで、長期間の系統性という面において、十分な見通しをもてていないものが少なくないということである。

一つめについては、これを打開するためには、学習内容および児童の実態を出発点とすることで、まず子どもが「学ぶ」ことが何かを明確にし、それを実現するような材料を探して「教材化」し、国語科にありがちな「決まりきった教材の解釈を押しつける」ような授業にならないようにすることが課題である。つまり、教材から学習内容を決定するのではなく、学習内容および児童の実態を出発点として教材の発掘と検討を開始するということである。学習課題をまず設定し、それを実現するような材料を日常の言語現象から発掘して教材化することが大切である。しかしその際、設定された学習課題が本当に今目の前にいる子どもたちに必要なものなのか、また獲得可能なものなのかを十分に吟味してきたかどうかという反省がある。無論、学習者の実態把握は、単元構想の基本であり、それを疎かにしてきたという訳ではない。しかし現代の子どもが置かれている状況は、極めて変化が早く、従前の学習課題をそのまま適用すればそれでよいとは限らない。またそもそも学習課題自体に対する教師のイメージが不明確であると、そこから生まれる単元もまた見通しの浅いものとなり、その場限りの活動を促して終わってしまうような授業にもなりかねない。そこで本年度は、ねらいとする学習課題をより焦点化し、学習者の言語発達の全体像を見据えながら、それぞれの単元の位置づけを確認した上で、具体的な教材発掘の作業を進めていくことを提案したい。

今回の公開授業では、一つめの教材化について提案したい。教材化について、本校国語科で話し合いを重ね、今年編纂1300年ということで注目され、また湖山からも近い白兔を舞台にした「いなばのしろうさぎ」を共に取り上げることにした。このことにより、低学年での「いなばのしろうさぎ」の扱い方、高学年での扱い方ということでも、提案性のある学習が行えると考えている。

二つ目については、昨年度当該学年における語彙指導を、1年間の連続的な単元として構想し、それぞれの時間で行われる指導の連続性や展望について検討を行った。この点については、現在も継続的に研究を行っている状況で、結果としてどのような効果が表れているのかについては、まだ明確なことをいうことはできない。しかし、一つの単元として研究を完結させるのではなく、語彙を体系的・系統的に指導し、1年間の見通しをもって単元構想を行うことを、今年度も課題としていきたい。

(2) 子どもの学びの実態・期待する学び方

本校国語科では、以前より、国語科のねらいを「ことばを使って思考、想像し、ことばによって他者とコミュニケーションすることを通して、世界や他者、自己を認識し、表現する力を育てる」としている。児童の意欲を喚起する学習材の工夫・開発を行い、児童の「ことば」に対する感性を磨き、深く追求する力を育てていくことに取り組んでいる。

自分の考えや思い、想像したことを「ことば」を通して伝えるためには、相手によりよく伝えるために適したことばを使いこなす感性と表現力が必要である。それらを行くためには、まず、書いてあることを読み取る力が必要となる。そこで、何を読ませるかということ、教師が吟味し、児童に与える必要がある。

4年生のこの時期は、ある程度長い物語文や説明文を読みこなせるようになって来る時期である。子どもたちの読書傾向としては、低学年時代の絵本中心だった読書から、ファンタジーや小説、伝記など様々な分野の読書へと広がってきた。また、落語や故事成語・ことわざの本に興味を示す児童も出てきた。

本学級の児童は、4年生にしてはややことばが幼い印象があり、話し言葉も書き言葉も短い傾向がある。また、おとなしく自己主張が弱いため、なかなか自分の思いが言えない児童も多く、どのように言えばよいのかどう表現すればよいのかわからないという、表現力の弱さも感じる。そこで、楽しく意欲的にことばの学習に取り組むことにより、ことばの力を高め、ことばで伝えようとする力をつけさせたいと考えた。

今年度は、造語力ということに着目して、ことばとことばの関係性を高める活動もしていきたい。造語とは、新しいことば・用語を作り出すこと、つまり、既成の語の転用・複合や擬音・擬態などにより、新語を作ることである。本単元の学習の中で、再話（物語の再構成）に取り組み、自分たちなりのことばを使ってお話作ることが、子どもたちの造語力を高めてくれることを期待している。

本時の学習では、「いなばのしろうさぎ」の書き下し文や絵本の文章を音読したり、訳や自分たちなりのいなばのしろうさぎの話友達と一緒に検討したりすることで、楽しんで学習をさせたい。また、友だちの話をしっかりと聞き、お互いの工夫や不思議なところに気づいたりするようにしたい。

また、できあがった再話を「4年1組版いなばのしろうさぎ」にまとめ、きょうだい学年の2年生に伝えることにより、他者を意識した表現の仕方を学習していく。2年生はきょうだい学年であるとともに昨年の「実りの学校」でいなばのしろうさぎの劇をしておりまた2年生の国語の教科書にも簡単なストーリーも載っているため、2年生にとっても大切な学習になるだろうと考える。できた作品に質の高さを求めるのではなく、再話って面白い、友達に自分の考えた話を伝えると楽しいという気持ちの高まりを大切にしたい。また、読解力を高め、文章表現力を養うだけでなく、アイデアや意見、感想を出し合うという児童同士の「かかわり合い」を重視し、人のお話を関心をもって聞いたり、楽しんで表現したりしようとする態度を育てたい。

（3）本時の学習に向けての教材研究

平成23年度に実施された小学校学習指導要領国語では、新たに「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が設けられた。この背景には、日本の近代化・国際化に応じて、生活様式や考え方もが欧米化され、本来日本人がもっていた「和の心」ともいう、日本の情緒や感性がだんだん薄れていく事への危機感ではないかと考える。

平成19年に改訂された教育基本法でも、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。」と述べられているように、日本の伝統文化を尊重しようという方針が、教育全体に課題として提示されたのである。このような伝統文化を尊重しようという国の方針により、国語科教育にも、古典指導の充実ということが示されたのである。

このように、小学校でも古典の内容が扱われるようになってきた。しかし、それは単に中学校の内容を前倒しにするようなものであってはならない。現状は、枕草子や百人一首等が「無難な」教材として用いられざるを得ないのかもしれないが、それが果たして「最適な」選択であるのか否かは、疑問の余地がある。少なくとも子どもたちを古典に親しませるためには、何よりも教える教員が、古典への理解を深め、その意義を確認し、生活の中に生かしていけるようになる必要がある。そのためにも、「無難な」教材選択に逃げるのではなく、各教員が、新たな教材の発掘を進める必要がある。

本校が使用している教科書では、3年生で俳句について学習し初めて文語に触れるやいなや、4年生ではことわざ・故事成語、百人一首の学習になる。そして、5年生では、いきなり紀行文を書こうなどというやや乱暴ともいえる系列で古典を教えることになる。まだ十分に古典らしいものを読むことなく、いきなり文語で紀行文を書くことを要求されると、古典について難しいという印象を持ちかねない。

このように考えた場合、これまであまり扱われてこなかった作品で、かつ子どもたちへの興味関心をひくようなものはないかという観点から、教材を探すことに迫られることになる。そこで注目したのが「古事記」である。地域的にも身近な内容を含むこの神話集は、近年、国語教育の教材として用いられる事が非常に少なかった。しかし「古典の入り口」という観点からも、「物語の型を知る」という観点からも、極めて有効な素材としての可能性を秘めている作品である。編纂1300年という時期的なタイミングもあり、この作品を教材として用いるのにふさわしい条件が整っていると考え、今回、教材としての採用を決めた。

私たち大人は、小さい頃から昔話に慣れ親しみ、童歌とともに、伝承してきた。ところが、最近では、「桃太郎」や「一寸法師」、「かぐや姫」など、名前は知っているが話の内容までは知らない子どもが増えてきたように思われる。昔話は単に話のおもしろさだけでなく、日々の暮らし方や人に対する接し方、勧善懲悪を促すなど、子どもたちの心を育てるものとして、大切に伝承されてきた。また、古典と呼ばれる文章の中には、四季折々の自然の変化を敏感に感じ、自然を愛する心がよく現れたものが多い。このように、小さい頃から昔話や古典の文に触れることは、日本人が古より大切にしてきたものを知り、未来へとつなげる大切なものであると考えた。

本単元では、「いなばのしろうさぎ」を教材とすることにした。この話は、今年編纂1300年を迎える古事記に載っている話である。この話は、本校よりやや西に位置する白兔海岸が舞台となる。鳥取市のあちらこちらで「いなばのしろうさぎ」に関するイラストや商品を目にすることが多い。子どもたちにとっても、大黒主と白兔は、なじみの深いものである。この身近な話を使った学習活動を通して、伝統的な言語文化に触れさせていく。また、書き下し文を読むことにより、現代の口語との違い、文語独特の言いまわしや表現効果についても感じさせたい。

本単元の学習においては、謎解きや紙芝居にすることも取り入れながらこの話に対する興味を持たせ、楽しさを味わわせたい。さらに、友達と話し合うことや2年生に伝えることへの喜びや楽しさを感じさせたい。「話すこと・聞くこと」に関しては、普段の学習の中だけでなく、いろいろな場面を通して指導しているが、児童は話したい気持ちは強い反面、友達や教師の話聞いていなかったり、早合点してしまい内容を理解していなかったりということも多い。また、意見や感想を交流したり、質問したりというような「コミュニケーション能力」については、これからも継続した指導が必要である。

3 単元の目標

- ・「いなばのしろうさぎ」を読み、物語の情景を思い浮かべたり、いろいろな「いなばのしろうさぎ」を読み比べたりすることができる。
- ・話のだいたいを知り、2年生にわかりやすいことばで「4年1組版いなばのしろうさぎ」をつくることのできる。
- ・自分たちの選んだ方法で表現したいという目的を持ちそれにあった紹介の仕方を考え発表することができる。
- ・相手にわかりやすくはっきりした発音で話すことができる。

4 学習計画（全7時間）

第一次 「いなばのしろうさぎ」について知り、学習の見通しをもつ。（1時間）

第二次 書き下し文に触れ、興味をもった部分を訳してみる。（1時間）

グループになり、自分たちなりの表現方法を考える。（1時間）

グループごとに、発表の準備や練習をする。（2／3時間・・・本時）

第三次 2年生に発表をし、感想を聞く。（1時間）

5 本時について

(1) 本時目標

○友達同士で「いなばのしろうさぎ」の音読をしたり、話し合ったりすることができる。

(2) 本時の展開 (○教師の意図 ◇全体への支援 ◆個への支援)

学 習 活 動	教 師 の 支 援 ・ 意 図
1 今日の学習課題を明確にする。	1 ○本時の活動を確認し、各自の学習のめあてを持たせる。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> <p>◎ 「4年1組版『いなばのしろうさぎ』をつくろう。</p> </div>	
2 古事記「稲羽の素戔」の書き下し文や絵本の文章を読み比べ自分たちの選んだ場面を音読する。	2 ○どのような意味かを考えさせながら、音読させたい。 ◇声に出して読ませることで、内容と文語の語感を感じ取らせる。 ◇いきなり訳を考えることは難しいので、班で何度も声に出して読んだり、知っている言葉を辞書を使って調べたりして促す。 ◆グループで読むことにより、一人一人が自信をもって読めるようにしたい。
3 自分たちのグループが選んだ場面の内容を確認して、それぞれの表現方法で練習する。 予想される表現方法 ・ ペープサート ・ 歌 ・ 紙芝居 ・ 劇 ・ クイズ ・ パネルシアター	3 ○同じテーマでもいろいろな表現方法があることを知らせ、どのような点に着目して表現すればよいかを理解させたい。 ○気づいたことや疑問をカードに書いておき、今後の課題にさせたい。 ○2年生が理解できる言葉で表現するように、声をかけたい。 ◇グループの中で、お互いに聞いたり話したりして、班で作り上げようとするように、声をかける。 ◆早くできたグループは参観者に発表しアドバイスをもらうように、声をかける。 ◆自分なりの表現ができたグループを紹介することにより、悩んでいる班や児童の助けとしたい。
4 今日の学習をふり返る。	4 ○本時の学習をふり返り、次時のめあてを持たせ、意欲的な学習へとつなげたい。